

## 「総合的な探究の時間」で

## 資質・能力を育む指導と評価を

## 模索し、その経験を

## 新教育課程での教科指導に生かす

### 静岡県立静岡東高校

#### 学校概要

設立 1963 (昭和38) 年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年280人  
2021年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、旭川医科大学、北海道大、東北大、筑波大、横浜国立大、静岡大、浜松医科大学、名古屋大、京都大、神戸大などに122人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ717人が合格。

静岡県立静岡東高校は、2019年度に策定した育成を目指す資質・能力とグランドデザインを基に、22年度から授業時間を50分間に変更するという課題を乗り越えて新教育課程を策定した。先行実施した「総合的な探究の時間」では、資質・能力の育成を図る授業づくりと学習評価の方法を模索。それを踏まえて21年度、教科単位で学習評価の方法を検討し、試行した。

教師アンケートの結果を踏まえ、  
育成を目指す資質・能力を設定

2018年度、静岡県立静岡東高校は、新学習指導要領の実施や大学入試改革の対応に向けて動き出した。少子化や施設の老朽化、近隣校の特色化といった環境変化もあり、生徒募集を強化するため、「未来構想委員会」を設け、育成を目指す資質・能力として「10の資質・

能力」を定め、グランドデザイン(以下、GD)の案を作成した。

19年度はまず、その案の本格的な検討に向けたアンケートを全教師に実施。その結果を受け、10の資質・能力のうち、生徒が既に身につけていると思われるものを整理し、課題設定解決能力・論理的思考力・自己実現力・自己管理能力・発信力・自己肯定力・社会参画力の「7の資質・能力」に精選した。GDは、育成を目指す生徒像として、「主体的に人生を切り拓き、高い志を持って社会に貢献する人材」を掲げるとともに、その達成に向けた5つの柱(授業改善と学力向上、自主自律の精神と豊かな人間性の育成など)を設定した。加えて、教師へのアンケートの結果で、生徒に優先して身につけさせたい資質・能力として上がった



校長  
鈴木伸彦  
すずき・のぶひこ  
教職歴37年。同校に赴任して1年目。



教務主任  
中上明仁  
なかうえ・あきひと  
教職歴21年。同校に赴任して4年目。理科(化学)。



探究活動推進室主任  
湯川淑子  
ゆかわ・としこ  
教職歴28年。同校に赴任して4年目。英語科。



教務課  
神谷隼基  
かみや・としき  
教職歴6年。同校に赴任して2年目。数学科。

た「課題設定解決能力」と「論理的思考力」の育成を目標に、「総合的な探究の時間」(以下、「総合探究」)を実施。それまでの「総合的な学習の時間」は体系的な取り組みになっていなかったが、「総合探究」はGDの下、SDGsをテーマとして授業案やルーブリックの作成を進めた。そうして、資質・能力を育成する授業づくりを、まずは「総合探究」で模索し、20年度を迎えた。

※プロフィールは、2022年3月時点のものです。

不断の改善で推進する 生徒主体の新教育課程

「議論の中で、GDで『授業・部活動・学校行事等への主体的な取り組み』を掲げている以上、総単位数を増やして生徒から放課後の時間を奪うべきではないとの意見が出ました」50分授業の編成下では、現行よりも15分早く6限目が終わる。その時間は、課外活動や部活動など、生徒の主体的な活動の時間に充てることにした。

20年度は、教務主任と各教科の代表者から成る「教育課程検討委員会」を設置し、新教育課程の編成に着手(図1)。議論を重ね、それまでの総単位数を保ちつつ、22年度から授業時間を現行の65分間から50分間に変更したと、教務主任の中上明仁先生は振り返る。

GDをよりどころとして、総授業時数を決定

図1 静岡県立静岡東高校 2022年度入学者 教育課程

教科	科目	標準単位数	共通		文系			理系	
			1年	2年	3年			2年	3年
					選択A計5	選択B計3	選択C計3		
国語	現代の国語	2	2						
	言語文化	2	3						
	論理国語	4		3					3
	文学国語	4		3				2	
	古典探究	4		3	4			2	2
	古典探究演習	3				3	5		
地理歴史	地理総合	2		2				2	
	地理探究	3						1	3
	歴史総合	2	2						
	日本史探究	3		4*	4*				
	世界史探究	3							
	日本史探究演習	2				2			
公民	公共	2		2				2	
	政治・経済	2							
数学	数学I	3	3						
	数学II	4	1	2				3	
	数学III	3						1	2
	数学A	2	2						
	数学B	2		2				2	
	数学C	2		1					2
	数学IⅡABC演習	2				5			2
理科	物理基礎	2	2						
	物理	4						3*	4*
	化学基礎	2	2	1					
	化学	4						3	4
	生物基礎	2		2				2	
	生物	4							
	化学基礎演習	1				1	3		
	生物基礎演習	2				2			
保健体育	体育	7~8	2	2	3			2	3
	保健	2	1	1				1	
芸術	音楽I	2	2						
	美術I	2							
	書道I	2							
	音楽I演習	2				2			
	美術I演習	2				2			
外国語	英語コミュニケーションI	3	3						
	英語コミュニケーションII	4		4				3	
	英語コミュニケーションIII	4			4				4
	論理・表現I	2	2						
	論理・表現II	2		2				2	
	論理・表現III	2			2				2
	英語コミュニケーションII演習	3							
論理・表現II演習	3				3				
家庭	家庭基礎	2	2						
情報	情報I	2	2						
校外学修活動 専門教養講座			1~6	(1~2■)	(1~2■)	(1~2■)		(1~2■)	(1~2■)
共通教科計			31~33	31~33	20~22			31~33	31~33
教科合計			31~33	31~33	20~22	5	3	3	31~33
東陵セミナー			3~6	1	1		1		1
合計			32~34	32~34			32~34		32~34
特別活動	ホームルーム活動		1	1			1		1

注1) \*の選択科目は、2年次と3年次で、同一の科目を選択すること。注2) ■は、任意の選択であり、修得した場合、修得単位数が最大2単位上乗せされる。 ※学校資料を基に編集部で作成。

また、「7の資質・能力」を新学習指導要領で示されている「資質・能力の3つの柱」に沿って分類すると、「知識・技能」に対応する資質・能力が含まれていなかったが、そのことについて、鈴木伸彦

校長は次のように語る。「確かに本校の生徒は、中学校までの学習で、一定レベルの知識・技能を既に身につけていると言えますが、高校では、大学や社会での活躍を見据えて、さらに高いレ

ベルの知識・技能を習得する必要があるはずですが、本校で身につけるべき知識・技能とは何か、どのような内容であるべきかを、教育活動を実践する中で、今後も議論を重ねていく必要があるでしょう」

定期考査等は観点別の作問で、学習や指導の改善点を見いだす

21年度は、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実に努めた。教務課の神谷隼基先生は、担当する1年生の数学で、5人の教科担当と、育成を目指す資質・能力を評価するための定期考査や校内実力試験の問題を協議した。その結果、現行課程の4観点のうち、「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」をそれぞれ評価する問題を作成。「技能」を評価する問題は、「知識・理解」の応用問題の位置づけとし、「思考・判断・表現」を評価する問題は、授業で扱わなかった題材の問題や大学入試問題を改変した問題とした。

試験後には、正答率に応じて、「基礎問題に取り組んでみよう」「発展問題に挑戦しよう」などと、生徒個別に学習指導を行った。「テストを重ねることに、生徒から、『学習法に不安があったので、先生のアドバイスが役に立った』といった声が聞かれるようになりました」（神谷先生）

観点別の出題によって、指導の改善点も見えやすくなった。例えば、考査結果を分析すると、「思考・判断・表現」の問題に無解答の生徒が一定数いることが分かった。

そこで教科内で話し合い、テストの返却時にその問題の解法を示し、生徒に段階を追って解き直しをさせることで、生徒がつまづいている点を解消しやすくなった。

発展的な課題のレポートで、主体性を客観的に評価

「関心・意欲・態度」の評価は、パフォーマンス課題で行った。「江戸時代の算額（\*）」を例にした作問「や」「ポーカーの役が出る確率と新しい役の考案」といった課題を出し、生徒に事前に示したルールブックに沿って評価した。

パフォーマンス課題を通じて、数学の面白さを感じ、意欲的に取り組む生徒や、模擬試験の成績が伸びている生徒が増えている。「パフォーマンス課題からは、課題に粘り強く取り組んでいるか、試行錯誤しているかといった

図2 「東陵セミナー」（総合的な探究の時間） 2年次 授業案（抜粋）

歴史をたずね		半室に開いかけ		ひとりひとりが明日を拓く												
1. 課題設定・リソース・フィードバック		2. 問題設定・リソース・フィードバック		3. ポスターセッション												
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
R3 1,2年生 (58,59期生) 東陵セミナー (課題探究) 授業案 ① 2月18日 (金) 13:55~14:55																
内容	1年間の探究学習を振り返り、今後の展望を持つ															
形態	HR 教室										教室					
観点	知識・技能					関与力・知識習得力										
	思考力・判断力・表現力等					課題設定解決能力・論理的思考力・関与力										
	学びに向かう力、主体性等					自己実現力・自己管理能力・自己肯定力・社会参加力・協働力										
準備物	配布→回収			1,2年生:「SDGs 探究学習自己評価表」			探究室									
	配布→Classi															
	その他															
活動																留意点
1年生																代表チームの生徒(後面参照)
13:55	本時の説明															・ポスターを持って、発表する教室の廊下に行き、待機する。
14:00~14:20	2年生の代表チームによる発表+質疑応答															2年生:13:55 1年生:14:25
14:20~14:50	探究学習の振り返り															・発表5分程度 質疑応答5分程度 20分の時間を有効活用してください。
	・「SDGs 探究学習自己評価表」(両面) 記入 ・作成したポスターの写真をClassi ポートフォリオ「ストーリー」に記録。ストーリーの探究学習に記入。															・発表終了後、自分の教室に戻る。 ・探究学習自己評価表「探究学習リフレクション(Classi)」は自宅で記入して担任の先生に提出する。
14:50	Classiのストーリー、探究学習に「探究学習を通して学んだこと」を記入。															生徒への連絡
2年生																作成したポスターの写真を撮りClassi ポートフォリオに必ず記録する。
13:55	活動教室に移動・本時の説明															・フィールドワーク先に可能な範囲で、お礼を兼ねて、ポスターの写真を送付する。
	探究学習の振り返り															
	・「SDGs 探究学習自己評価表」 記入(両面)															
14:25	自分のHRに移動															
14:30~14:50	1年生の代表チームによる発表+質疑応答															
14:50	Classiに本時の記録をする「探究学習を通して学んだこと」 *作成したポスターの写真をClassi ポートフォリオに記録(各自) *ポスターはCC教室にある額に返却する。															

「東陵セミナー」における育成を目指す資質・能力は、観点別評価の3観点と探究学習の意義を考え、知識習得力などを含めた10の資質・能力とした。 ※学校資料を抜粋して掲載。

えています」（神谷先生）

「総合探究」で行った  
観点別評価を、教科指導で応用

育成を目指してきたことが見取りやすく、それらが、新学習指導要領では、『主体的に学習に取り組む態度』として評価の観点の1つになったのだと捉えています。新学習指導要領の趣旨は十分理解できず、それを実現すれば、生徒の力をより伸ばしていけると考

21年度には、「東陵セミナー」と名づけたSDGs 探究学習が、「総合探究」の自校のスタイルと

\* 数学の問題を考案し、奉納した絵馬のこと。

不断の改善で推進する 生徒主体の新教育課程

して全校にほぼ定着した。先進校である静岡県立三島北高校の授業案を参考に、探究活動推進室が授業案を作成(図2)。それを基に、担任・副担任が授業を進めた。授業案には、活動の内容や留意点に加えて、自校が育成を目指す資質・能力と、それらが「資質・能力の3つの柱」のどれに該当するのかを明示されており、教師はそれらを意識しながら授業を進めることができた。

ルーブリックは、観点別評価の3観点と「7の資質・能力」、SDGsの理念を踏まえて作成。①調査研究(調査・研究)②ポスター(内容・見やすさ)③ポスターセッション(プレゼンテーション・質疑応答)の6項目それぞれの到達度を、生徒の自己評価と教師の評価で測った。

「授業案に基づいて指導し、ルーブリックによる評価を行うことで、担当教科での観点別評価をイメージできるようにしました。19年度から新学習指導要領に基づいて『総合探究』の指導と評価に取り組んできたことが、22年度からの各

教科・科目の授業や学習評価に生きたと感じています」(中上先生) 探究活動推進室主任の湯川淑子先生も、手応えを語る。

「『東陵セミナー』を通じて、パフォーマンス評価に関心を持つ先生方も出てきました。『東陵セミナー』の授業案やルーブリックを基に、担当教科の授業案やルーブリックを作成することができれば、教師の負担が軽減されますし、GDに沿った授業を展開する上でも有効だと思っています」

21年度は、静岡県教育委員会の「オンラインワン・ハイスクール事業」の指定校として、静岡県立大学との連携が本格的に始まり、大学教員から専門的な助言を得られるようになった生徒は、「総合探究」への意欲を一層高めている。

教師間の議論を通じて、校内の温度差をなくしたい

22年2月には、静岡県総合教育センターが用意した書式で、22年度1年生の全教科・科目のシラバスを作成した。今後、各教科・科

目の目標と「7の資質・能力」との関連を明示し、GDを反映した評価方法を確立させていく。また、教務課は、観点別評価の結果を評定に総括するための、3観点のABCの数に対応した評定換算表を作成した。各教科・科目がその換算表を基につけた評定の妥当性を検証することも、今後の課題だ。

それらの取り組みを通じて、新教育課程での授業づくりと学習評価に関する目線合わせがより進むのではないかと、湯川先生は語る。

「SDGs探究学習を始めた当初は、その意義を共有することが難しかったですが、探究活動推進室を中心に先生方が粘り強く取り組み、その結果、生徒が熱心に活動し、成長していく中で、少しずつ共通認識が図られていきまし

くりと学習評価についても、それが生徒の成長につながるものだと実感することができれば、その意義が浸透し、温度差は徐々に解消していくと思っています」

今後も、生徒のために何ができるのかを教師が徹底的に話し合い、意思疎通を図ることを大切にしたいと、鈴木校長は語る。

「多様な考え方を持っているのがあたり前で、全教師が全く同じ課題意識や解決方法、目的、志向を持つとは考えにくいでしょう。しかし、現状を打開し、よりよい教育をしたいという思いが、仕事の原動力となることは共通であるはず。生徒や学校の進むべき方向について、回り道でも全教師で議論を重ね、最大公約数を探り、常に生徒を大切に育てる学校を目指していきたいと思っています」

4月以降の課題

- 各教科・科目で育成を目指す資質・能力と、「7の資質・能力」との関連を明確にする
- 観点別評価の結果を評定に総括する方針を踏まえてつけた評価の妥当性を、各教科・科目で検証する